

鳴門教育大学同窓会会報

2025年 5 月 1 日発行

鳴教で学んだ絆を永遠に

鳴門教育大学同窓会会長 横 畠 道 彦

会員の皆様には、日々健やかにお過ごしのこととお喜び申し上げます。多くの会員の皆様に支えられて同窓会活動が続けられていますことに改めて感謝申し上げます。

ご承知のとおり鳴門教育大学は、開学以来、常に社会の要請に応え、わが国の教師教育つまり教員養成と現職教員教育を先導する研究と実践を蓄積しています。その結果として、鳴門教育大学学校教育学部卒業者の教員就職率は、全国44の国立教員養成大学・学部の中で第1位という結果となっています。教職大学院生においても教員就職率は高く、多くの院生が教職につく夢を実現しています。

また、鳴門教育大学は、卒業生や修了生等に対しても、全国各地に赴いての講演会の開催や同窓会支部集会への出席、同窓生のための相談室の設置、卒業生及び修了生等に対する就職支援等、卒業後・終了後のフォローアップ等にも、力を注いでいるところです。

さて、現在同窓生は12,400名を超える規模となり、全国には11の鳴門教育大学同窓会支部が設立され、世代や立場等の違いを超えた温かな交流がなされています。皆様方、それぞれが鳴教で学んだ絆を大切にして、卒業後、修了後の長き人生を有意義に感じていただくためにも、同窓会や同窓会支部活動への積極的な参加をお願いいたします。

ところで、先日「南海トラフ巨大地震の30年以内の発生確率が80%程度に引き上げ」との報道に対して、「どのように対応すればいいのかわからない」という声が多くありました。そこで、今回は、震災を経験した方や防災教育の実践に力を注いでいる方に原稿を執筆していただきました。お寄せいただいた原稿には、災害発生のメカニズムを知ること、社会と地域の実態を知ること、備え方を学ぶこと、災害発生時の対処の仕方を学ぶこと、そして、それを実践に移すことの大切さが記されています。災害は、時とところを構わず突然やってきます。私たちは、常に心構えと対応を意識しながら生活していきたいものです。

この同窓会便りを、ぜひ、防災教育の重要性を学ぶ機会にしてくださいと幸いです。

結びに、会員の皆様のご健康ご多幸を祈念し、挨拶とさせていただきます。

能登からの便り 「令和6年能登半島地震から学んだこと」

井 上 正 浩

(自然系コース(数学) 昭和62年度修了)

令和6年元日、16時10分発生の能登半島地震で家が傾き住めなくなり、家族の生活は一変しました。私の家では、家族8人分のヘルメットなどをバックに入れ玄関先に置いていました。原子力発電所での防災訓練で交通渋滞が起きたこと、放射能が漏れると半径30km圏内の立ち入りが禁止され、圏外にいる私たちも陸路では能登半島から出られないことを知り、魚釣りで使っていた小船を家族全員が乗れるもの買い替え、船舶免許を航行範囲の制限のないものに更新し、いざとなったら海向かいの富山へ避難する備えも10年ほど前にしていました。防災意識は低い方ではなかったと思っています。しかし、今回の地震により海底が4m隆起し、船が出せない港もありました。町内の防災倉庫に保管してあった住民数日分の備蓄食料は、帰省者も多く、元日の夕食ですべてなくなりました。さらに、飛行機事故や交通渋滞の影響もあり、食料は届きませんでした。災害への備えはしていましたが、思いも寄らないことが起きました。

私たちの地区は甚大な被害を受けた家屋がほとんどで、発災直後には倒壊した家に閉じ込められた人があちこちにいましたが、近所の人たちが協力して救い出し、犠牲者は出ませんでした。避難所となった小学校では、倒壊した家

から運び出せたおせちや餅などを分け合い、食料不足の急場をしのぎ、仮設住宅では、一人暮らしの方々にも声をかけながら助け合い、不便ながらも楽しい生活を送っています。一般的に言われている災害への備えをしたうえで、不測のことにどう対処するかを考えたとき、日頃より町内の人たちやご近所さんと協力し合える関係を築き、声をかけながら楽しく生活を送ることが何よりの災害対策になると実感しています。

住みなれた家や多くの思い出のものをなくすなど、この地震により失ったもの、マイナス要素は計り知れませんが、全国各地からのボランティア、解体業者の方々との出会いや交流、仮設住宅で新たにご近所さんとなった方々とのお付き合い、多くの方々からのたくさんの学びなど、プラス要素がたくさんあります。結果的、総合的に見るとプラスになっていると思えるのは、復興にご配慮いただいている多くの方々のおかげです。

たいへんなご心配をおかけしています。全国各地からの温かいご支援に感謝申し上げますとともに、まずは10年後の能登に期待していただけたらと思います。

■ 宮城県女川町からの便り 「念のため」

沖 田 淳

(人間形成基礎コース 平成6年3月修了)

東日本大震災の発生から14年が過ぎた。当時、私は、宮城県女川町立女川第一中学校に勤務していた。それは、翌日の卒業式に向け、三年生（二名が犠牲となった）は既に帰宅し、一・二年生が準備に当たっていた時にやってきた。激しく長い揺れに泣き出し、動けなくなる女子生徒もいる中、校舎の外へ避難した。雪が降り出し、ブルーシートを屋根にして生徒を待機させ、高台にある学校から町を眺めると、津波が到来したのが見えた。学校と町職員も含めて協議し、この場でも大丈夫だと思われるが、「念のため」という判断で、さらに高台にある浄水場まで生徒を避難させることになった。移動の途中では、五階建ての公共施設の屋根部分のみが海水の上にある光景が見えた。「生徒たちに見せるな!」という校長の声が響き、私たちは、生徒たちに「大丈夫!」と声掛けしながら目的地にたどり着いた。ここからは町のような見えなかった。その後、町民体育館に避難して、皆で一夜を過ごし、翌日からは学校に戻り、避難を続けることになった。後に、私たちは、この「念のため」という意識の大切さについて語り合った。何かを為したり、計画したりする際に、もう一度「念のため」という視点から見直していくと、もう一段レベルの高い「安心・安全」のための方策が見えてくるのではないかと。また、その多くは、「空振り」に終わるかもしれないが、それでよいのではないかと。しかし一方で、「念のため」と家族の安否を確認しに戻った保護者が犠牲になってしまったという事実など、マイナスに作用する場合があることも心に留めておきたい。現在は、退職し、町内会の役員として地域の防災にも関わっているが、この言葉を様々な場面で意識するよう心がけつつ、その在り方を自問している。

■ 兵庫県からの便り 「防災教育にかける思い」

秋 山 容 洋

(言語系コース 英語 平成20年度修了)

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は決して忘れることはできない。30年近くたった今も朝5時46分になると黙祷を捧げ、甚大たる被害の悲惨さを風化させまいと心に刻みながら生活をしている。

我々が必要なことは、今後再び起こるであろう災害に対して、いかに被害を少なくし、「減災」に努められるかである。少しでもその被害を少なくするためには、実際を想定した避難訓練が必須であろう。

本校では、徹底した防災訓練を実施している。例えば、幼稚園・小学校・中学校そして高等学校と合同で実施される。避難する際は園児に高校生が付き、一緒に引率するようにしている。ルートをある程度確定し、高校に避難するようにしている。高校はちょっとした高台にあり、津波が来ても安心と想定されている。避難後、自衛隊等の協力により、消火器の使い方を学んだり、緊急搬送の仕方を学んだり、避難場所での過ごし方を学んだり、本格的に被害があったことを想定した訓練が考えられている。さらに徹底しているのは、炊き出しをすることである。大鍋やガスを

借りてきて、実際にお米を炊き、カレーをつくるのである。訓練が終わった後、校区内すべての園児・児童・生徒・教師そして自衛隊の方々が一緒にカレーを食べる姿は何とも微笑ましい。準備や片付けは大変だが、みんなで一緒にすると何でも乗り越えられると訓練を通して教えられた気持ちである。いつ発生するか分からない震災に対して、普段から万全の気持ちでいたい。

兵庫県で中学校英語教師になり早15年。「一日一生」の気持ちで未来を担う子供たちのために、楽しみながら働いている。大切なことは、「大人から楽しむ姿を見せること。」そして、「学び続ける姿を見せること。」だと強く思っている。AIが台頭し、先行きが不透明な昨今、一人ひとりの子どもたちが夢実現できる社会であり続けることを願って、「今」できることに全力で取り組みたい。



高知県黒潮町からの便り

「最大震度7、最大津波高34.4mの地震に立ち向かうために」

明 神 通 恭

(学校・学級経営コース 平成26年度修了)

1 最大震度7、最大津波高34.4mの町・・・【黒潮町の取組】

2012年3月内閣府より南海トラフの巨大地震による震度分布・津波高の推計が公表された。結果は日本一厳しい最大震度7、最大津波高34.4m。これを受けて「犠牲者ゼロ」のまちづくりを目指して25の指針が提示され、町をあげて未曾有の大地震に立ち向かう取組が進められており、町内の教育機関でも各校の実態に即した防災教育が行われている。

2 三浦小学校の防災教育・・・【自主・自律から協働・共生へ】

2年前に校長として赴任した際、子どもに対する過保護・過干渉な教育や対応が日常化し、大人の善意が子どもの成長機会をスポイルする姿を目の当たりにした。当然の結果として、子どものレジリエンスや主体性が育っていないことに危惧を覚えた。

そこで【自主・自律から協働・共生へ】という理念のもとに【自分で、できる 仲間と、できる】という教育目標を設定して「子ども達の進む道を掃き清めるのは大人の仕事ではない。石ころの上や藪の中をかき分けて自分の道を歩いていける人を育てることが大人の仕事」「子ども達に挑戦する楽しみを味わわせる。子ども達は成功より失敗から多くのことを学ぶ」という理念を共有し、あらゆる教育場面で実践することを確認した。

また、これまでの防災教育を検証すると授業や避難訓練を実施することが目的化しており、「被災時に自分や家族の命を守る、その上で学んだことや身に着けたことを活かして地域の防災に貢献できる人材を育成する」という目的に迫ることができていなかった。

この状況を打開するために、まずは『災害時の状況をよりリアルに体験させる』こととし、起震車のMAX震度7を全員が体験、浄水装置を使ってプールの水を試飲、缶詰とアルファ米の食事、避難所テントの設営、発煙筒を焚いての煙のなかで避難など訓練の質にこだわって防災教育を行ってきた。被災による困難な状況を体感したことで、実際の災害時に冷静な行動がとれることを期待している。

3 これからの防災教育について・・・【あきらめない防災教育を目指して】

『想定外』が災害の常、訓練の企画もより厳しいものが求められていると思う。災害時に頼れる大人がいるとは限らないので、子ども達には、よりリアルな状況下で訓練する必要があると考えている。来年度は子ども達に「どんな避難訓練が必要か」案を出させて、企画・運営をさせてみたい。また、保護者からも「起震車や煙の中の避難など、子どもと一緒に体験したい」という要望が出されており、ぜひ実現したいと考えている。

全国で震災に立ち向かい逞しく生きる方々を見習って、防災教育を通じて「困難な状況に直面しても、生きることをあきらめない逞しい子どもの育成」に取り組んでいきたい。

環境は物言わぬ教師である

鳴門教育大学学長

佐 古 秀 一

本学を訪問された方から、「国立大学とは思えないきれいなキャンパスですね」という感想をお聞きすることがたびたびあります。初代の前田学長先生以来、歴代の学長先生、教職員、同窓会、後援会の方々のご尽力、ご支援によって、美しく整ったキャンパスが作られ、維持されてきました。

このたび（令和6年度）、講義棟（B棟）内部の改修を行いました。テーマは「未来の教師を育む教室づくり」です。学習観・指導観の転換とGIGAスクール構想が具体化する中で、「主体的・対話的で深い学び」の実現が目指されています。これからの学校教育を担う教師には、自ら主体的で対話的な学びをしっかりと経験しておくことが必要です。このため、ICTを活用して、学生が個別の学びを深めるとともに、教員と学生ならびに学生同士が縦横に情報交換が可能な環境を整え、学生の主体的で協働的な学びを促す教室環境とすることをねらいといたしました。

同窓会からも多大なご支援をいただき、教室の整備を進めることができました。この場をお借りしまして、心より御礼を申し上げます。ご寄付をいただいた方からは、「知識伝達型の教育ではなく、探究的な学習を指導できる教師を育ててほしい」であるとか、「未来の教育を担う教師になってほしい」など、熱いメッセージもいただいております。

同窓会の皆様からいただいたご支援、ご鞭撻に応えるべく、「よい教師を一人でも多く」育て、もって未来社会の構築に寄与する所存です。

あらためまして、同窓会の皆様からのご支援に心から感謝を申し上げますとともに、引き続き、教育環境の充実に向けたご支援を賜りますよう、お願いをいたします。



連絡事項

1. 同一住所に、同居（同一姓）している郵便物の発送について

郵便料金が、110円に値上げされました。同窓会事務局では、通信費節約のため、同一住所の会員宛の文書等は、まとめて1通郵送させて頂くことになりました。1人一通をご希望の方は、「異動通知連絡カード」でお知らせください。

2. 鳴門教育大学同窓会のホームページのご案内

同窓会の役員一覧、会則、同窓会・クラス会への後援援助金支給基準等の会計規則が掲載されています。同窓会のホームページは鳴門教育大学のホームページから入れます。

3. メールアドレス提供のお願い

郵便料金の値上げ等の関係上、経費削減のため、メールにて会報を送信することを検討しています。下記メールアドレスへ送信または、同封の「異動通知連絡カード」で提供してください。

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748

鳴門教育大学同窓会事務局長 土井 榮次

電話：090-5279-1466 e-mail：nueaa@naruto-u.ac.jp